

養殖魚介類の魚病診断件数の推移と主な疾病							
<p>(要約)平成13年から17年度における魚病診断件数を調べた結果、魚介類の診断件数は増加傾向にあり、魚病診断件数の増加はクルマエビ養殖におけるフサリウム症、ビブリオ病のまん延が主な要因であった。一方、近年の海産魚類の魚病診断件数は80件台で安定しているのに対し、淡水魚類では診断件数が増加した。平成17年度の主な疾病は海産魚類ではイリドウイルス病と類結節症、クルマエビはビブリオ病で、水産用医薬品に対する耐性菌の出現も確認された。</p>							
沖縄県水産海洋研究センター 海洋資源・養殖班					連絡先	098-994-3593	
部会名	水産業部会	専門	水族病理	対象	養殖魚介類	分類	指導
普及対象地域							

[背景・ねらい]

養殖魚介類の生産量の増加に伴って多発する魚病の被害を軽減するために、魚介類の種苗生産や養殖時に発生する疾病の種類、時期、薬剤感受性を調べ、有効な対策または治療方法を指導することによって、養殖魚介類の安定生産に寄与することを研究の目的とした。

[成果の内容・特徴]

1. 魚介類の魚病診断件数は平成13年に148件、14年162件、15年128件、16年196件、そして17年に190件と近年は増加傾向にあった(表1)。
2. 海産魚類の診断件数はイリドウイルス病が多発した平成14年が105件と最も多く、次に15年の89件、17年の86件、16年の85件、そして13年の76件の順であった(表1)。
3. クルマエビ養殖ではPAVの検査件数の低下に伴って、平成15年までは診断件数が減少した。しかし、平成16年はフサリウム症、17年はビブリオ病が多発して診断件数が増加した(表1)。
4. 淡水魚類の診断件数は平成15年からKHVの検査体制の強化に伴って増加し、17年には沖縄県内で初めてKHVの発症がニシキゴイから確認された(表1)。
5. 平成17年の魚種別の魚病診断件数はクルマエビが92件、診断件数全体の48%と最も多く、次にスギの46件、24%、そしてヤイトハタ23件、12%の順であった(図1)。
6. 平成17年度の主な疾病はマダイ、ヤイトハタ、クロマグロではイリドウイルス病、ハマフエフキとスギでは類結節症、クルマエビはビブリオ病であった(図2)。
7. 海産魚類養殖では類結節症に使用するアンピシリンとビブリオ病に使用する塩酸オキシテトラサイクリンに対する耐性菌が平成16年からみられ、クルマエビ養殖ではビブリオ病に使用するオキシリン酸と塩酸オキシテトラサイクリンに対する耐性菌が17年に確認された。

[成果の活用面・留意点]

1. 疾病の種類や発生時期を明らかにすることによって、魚病被害の軽減化が図れる。
2. 薬剤感受性を調べることによって、魚病に対する効果的な対策が図れる。
3. 疾病の早期発見によって、魚病被害のまん延を防止できる。

[具体的データ]

表1 魚病の診断件数の推移

年度	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	合計
海産魚類	76	105	89	85	86	441
クルマエビ	70	56	36	101	92	355
淡水魚類	2	1	3	10	12	28
合計	148	162	128	196	190	824

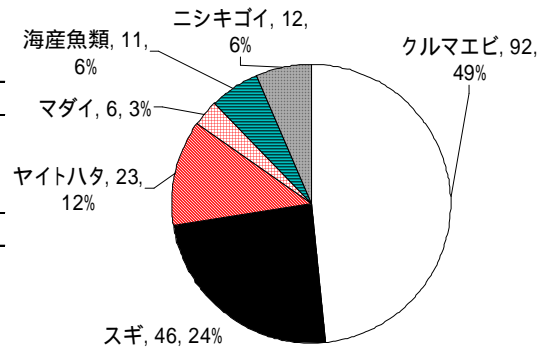


図1 平成17年度の魚種別の魚病診断件数

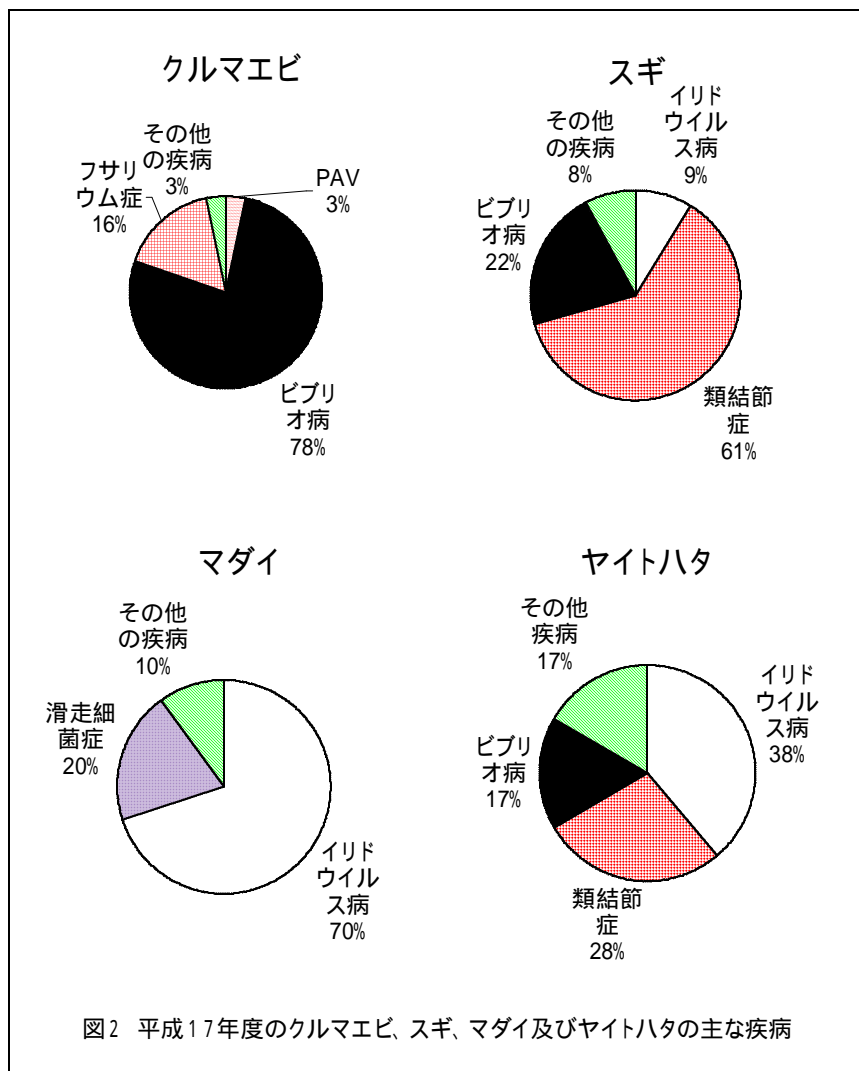


図2 平成17年度のクルマエビ、スギ、マダイ及びヤイトハタの主な疾病

[その他]

研究課題名：養殖魚介類の耐病性試験

予算区分：県単

研究期間：13年～17年度

研究担当者：玉城英信・中村博幸・杉山昭博・小澤明子

発表論文等：平成13年～17年度 沖縄県水産試験場事業報告書